

# フリーライダーの思想的基盤

— ミクロ的行動に限定された認知とリスクなき無責任 —

松井 勇起

Ideological Foundations of free riders:  
Limited Perceptions of Microscopic Behavior and Riskless Irresponsibility

MATSUI, Yuuki

キーワード：フリーライダー、社会的ジレンマ、ミクロ脳、思想パラサイト、最大無責任戦術  
Keywords: free rider, social dilemma, directivity for micro phenomena, egocentric abuse of ideologies, tactics of minimum responsibility

1, はじめに 「ミクロ脳」仮説と「思想パラサイト」仮説

自分が見た経験として衝撃的な経験を説明したい。あるところで A と B が論争していた。A は古典派経済学的なレッセフェールを主張する、所謂新自由主義と呼ばれる思想を信じている人物であり、B は A の方法論的個人主義的な発想に対して方法論的全体主義・共同体主義的な思想に基づいて反対するという立場であった。A は皆が自由に行動することが良いのだからそうすべきである、という趣旨の主張をその場で行っていた。A の主張は普遍的な思想に基づくものであり、例えば以下のように評価される。

我々は、自由主義や個人主義をかなり普遍的な原理と見なしている。そう見なせる理由は、事実そうになっていることの他に、もし我々がそれら原理を否定すれば、我々は他人のみならず我々自身の存在上の営為の損壊をも招くという事実にかかなりな根拠を持つ。もし私がこれらの原理を無視して他人を攻撃すれば、他人は私を攻撃するであろう。我々は自己の自由や人格をいとしく思う故に、他人の人格や自由を尊ぶという感情を大切にすべきことを悟るのである。ホップズやロックの個人主義や自由主義が、近代英国という特定の場所、特定の時期に生じたものであるにも拘わらず近代社会の普遍的価値というに近いものである理由は、このことにある。

(神野慧一郎(2002)『我々はなぜ道徳的か ヒュームの洞察』勁草書房, 120p.)

A に対する B の反論は社会的ジレンマ論<sup>1</sup>に基づくものである。社会的ジレンマ論とは「一人一人

---

<sup>1</sup> 例えば、海野(2021)、盛山(2021)、藤井(2003)、山岸(2000)などを参照のこと。

の行為者が自分にとって望ましい選択をした結果、すべての行為者にとって望ましくない状態に陥ってしまう<sup>2</sup>というメカニズムである。その類型として、共有地の悲劇、合成の誤謬、囚人のジレンマ、集合行為論、社会的手抜き、傍観者効果、公共財に対するフリーライダーなどが挙げられる。B の立場からすれば、A に対して以下のような疑問が浮かぶこととなる。個人の利益や自由を最大化するような思想、その人の自由や利益を最大化するような社会を維持するリソースの提供者を誰が行うのか、というものである。実際、社会的ジレンマ論のこれまでの知見を考えれば、マンデヴィルの考えるように各人の利己的な行動が社会全体にとっても最適である、とはいえない場合があることは既に示されている。ならば、各人の利己的な行動と社会全体での最適解が一致させ続けるための工夫、フリーライダーの防止などのコストを支払う必要がある。更にそのコストをだれがどう払うか、という形で二次のフリーライダー問題も考えなければならない。そこで、B は A に対して合成の誤謬をはじめとする社会的ジレンマ論の解説を行い始めた。

しかし、A は B の説明を全く受け付けなかった。理解（認知的共感）はするが（情動的）共感をしない、という立場表明ではない。認知的共感である物事そのもの理解そのものできない、といった反応をしたのである。A は所謂知的水準・教養水準に劣る人物では決してなく、むしろこれらに優れていると自他共に認められている人物であった。

このことは非常に興味深い事例であるように思われる。何故ならば、その時の A の反応は色覚異常の人物が特定の異なる色を同一と認識するというものと同じメカニズムであると予想できるものであったからだ。囚人のジレンマなどの社会的ジレンマ論では全体のメカニズムをプレイヤーが理解していても短期的な合理的判断をお互いすると、という説明がなされている。それに対して今回の場合は、そもそも全体のメカニズムを理解することがそもそもできない、という認識上の問題が個人の中で生じている、というケースだからである。

このようにマクロのメカニズムをそもそも理解できない個人を一旦「マイクロ脳」と定義する。このマイクロ脳について簡単な考察をすると、以下の様な議論を展開することが可能である。これまでの社会的ジレンマ論を踏まえれば、「社会的ジレンマを解消させることは不可能ではない」という結論が出ている。その方法は人々の心理に働きかけたり、協力行動を促す環境へと環境を再構築するという方略であるが、ただし、その際に一旦短期的な私益を制限することで公益を実現するという道徳的な目的を人々に共有させる必要がある。マイクロ脳の個体はこの点で道徳的目的を受け入れることが結果的に自分の利益にもなるという構造を認識できないということになるため、通常の設定よりも社会的ジレンマの解決が困難になってしまう。

例えば、マイクロ脳の個体が過半数を越える中で間接的民主主義の手法である投票を行ったらどうなるのか、と具体的に想定した際にその結末が絶望的になることは想像に難くない。所謂「一旦効用が減少するが長期的には効用が増大する政策」、例えば昨今の COVID-19 ワクチンを供給して国民に対してワクチン接種を促す政策は、国民に副反応等の一時的な負担を強いるものの、2022 年 1 月現時点では、医学的には国民の効用を増す、具体的には長期的に死者数・後遺症者数を減らす効果をもたらすとみなされている<sup>3</sup>。このようになした政策を実行したい場合、マイクロ脳の個体が過半数を占める、

<sup>2</sup> 海野道郎 (2021) 『社会的ジレンマ 合理的選択理論による問題解決の試み』ミネルヴァ書房, ip.

<sup>3</sup> 勿論、ワクチン接種の政策を支持しているからといって直ちにマイクロ脳ではないとは言い切れない。Covid19 に対する恐怖のあまりそのリスクのみに着目し、やはり全体像を見ていない可能性も十分にありうるからである。実際、自粛ムードを過剰に煽り、経済活動へのダメージを無視するような人々もまたマイクロ脳の特徴に合致する。

ないしは数で少なくとも世論形成力などで強い影響力・権力を発揮する場合、政策の実現可能性が大きく減少することとなる。

COVID-19 は 2022 年 1 月現在、医学・公衆衛生的にもその位置づけについて見解が分かれており、また WHO が初期対応に対して判断ミスを行って信頼を失ったこともあり、COVID-19 自体にまつわる問題を今回の議論で扱うのはいささか暴論かつ時期尚早のところがある。しかし、このような短期と長期の受益者にとっての利益が異なり、現在進行形で常に境界線が変動する政策が存在する自体は普遍的であり、COVID-19 対策に代表されるこうした問題にどう対処しつづけるかの基本的な方策を考えることが本稿の目的である。以上のマイクロ脳仮説はこれまでの社会的ジレンマ論の拡張となりうるものである。社会的ジレンマ論では海野が合理的選択理論に基づき合理的な個人を前提としているように、工学的な計算でモデル化を行いやすい理論構築が一つの目標となりやすい。また、限定合理性や進化ゲーム理論などを前提にする場合でも、あくまで合理的選択理論よりも現実への近似性を上げることが目的である。その意味で、本論もまた同様の目的に沿っている。

社会的ジレンマ論の拡張を考える上でもう一つ取り上げたい仮説として、「思想パラサイト」を挙げてこの章を終えたい。簡単に定義すれば、フリーライダーはその時に社会学者のブルデュー(1990)のいう、象徴資本の高い思想・イデオロギーに対してポジションを変更するコストと比較して得をすると判断した場合に思想・イデオロギーを変更する、というものである。象徴資本を主観的な価値に関する一つの効用関数と考えることで、これについても社会的ジレンマ論の一種として考えることは可能である。

既に先行研究として転向論が存在する。昭和戦前期において、日本共産党委員長である佐野学は同じく幹部である鍋山貞親と共に獄中で共産主義の破棄を示す転向宣言を出したことで多くの共産党員及びシンパも追隨して転向した事例を中心に、鶴見俊輔ら思想の科学研究会(2012-2013)は左派から右派への転向に限らず思想の変動を広く転向として扱う研究を行った。その際鶴見はそれまでの転向=悪、という考え方に修正を加えて、転向の善悪は単純には言えない複雑さがあると指摘している。思想の科学研究会が挙げた中で注目すべき事例は、哲学者である柳田謙十郎である。柳田は西田幾多郎の弟子であるが戦時中は戦争を賛美し、戦後には西田哲学を捨ててマルクス主義に転向したという思想遍歴がある人物である。ただし、信じる思想こそ変わっても過激な言説を振り回す点では変わっていない、と柳田の分析を担当した後藤宏行に批判されている。こうした事例はごく少数ではなく、例えば社会学者の清水幾太郎はマルクス主義、プラグマティズム、戦争賛同、反戦平和主義、再軍備賛同と何度も転向した変節漢<sup>4</sup>でありつつやはり柳田同様に過激な言説で空気を煽り続けた人物である。

共産主義からの転向は特高に代表される法執行機関からの、普遍的な人権を無視した肉体的・精神的暴力が背景にあったことは事実である。また、柳田と清水は転向前後でも過激な言説スタイルを維持した批判されやすい人物であったとはいえ、それぞれ環境の変化を敏感にとらえて学び直し転向した人物<sup>5</sup>ではある。本章で扱いたい「思想パラサイト」は、外部権力からの強制や、一からの学び直しと

<sup>4</sup> 竹内(2018)は、清水は他人から称賛されることを好み、その承認欲求のために行動する人間であると説明しており、それが転向が多かった理由と結びついているという。

<sup>5</sup> 清水は確かに機を見て時流に乗った側面も強いが、竹内(2018)は終戦直後という国家主義から左派に転向する人が多かった時期に清水は転向せず転向している知識人に違和感を持つ姿や、晩年に再度右派に転向した際もやはり知識人の世界では左派が主流であり批判されたことを紹介するなど、単に勝ち馬に乗ること自体が目的であるとは言い難い。庄司(2015,2020)は清水が常に学習を心掛けて価値観をアップデートしている様子を示しており、清水本人(1972)も学習をし続けることで

いう脳への負荷をかける行為ではない。要するに、勝ち馬に乗り多数派でいることや、象徴資本が高い思想に帰依することで他者に対して優位に立つことを目的とする転向を戦術として好む行動様式である。

本稿で扱う典型的な「思想パラサイト概念」を適用すると上手く行動を説明できる人物として、李氏朝鮮末期の国王高宗の妃である閔妃が該当する。詳細は後述するが、歴代李氏朝鮮自体が事大主義を外交方針にしていたといわれており、末期では中華王朝である清だけでなく日本やロシア、アメリカなどの列強が進出し、政変のたびに事大先が変わった。そうした環境の中で閔妃は当初義父である大院君の推挙で妃となったが、対立し大院君とその一派を追放し、大院君の鎖国政策に反対する親日派と組み、日本の援助のもとで開化政策を行った。しかし、大院君が壬午事変を起こすとこれを鎮圧した清に助けを求め事大先を変えた。日清戦争によって日本が勝利すると自分の権力が脅かされるのを恐れて事大先をロシアに変えて、危機感を覚えた在朝鮮日本公使三浦梧楼が大院君と組んで日韓の壮士を動員し殺害されるという最期を遂げた。閔妃の行動はあくまで自身の権力維持が目的（木村, 2007）であり、近代化に対する態度の急変もあくまで「近代化」を政治的カードとしか扱っていなかったとすれば、閔妃が思想パラサイトを行っていたという説明は可能である。

## 2, 認知資源論との接続

本稿ではフリーライダーの性質について考察を行い、最もフリーライダー的な個体とはどのような存在なのかをまとめることを目的とする。盛山(2021)は（非協力）ゲーム理論での構造と現実社会の違いを挙げている<sup>6</sup>が、主観的最適性の観点から各個人は判断・行動し、その結果社会状況が発生しているとしている。どれだけ有用なモデルを考える場合でも現実に対する近似度を上げることができるにすぎないが、それでも近似度を上げることでより精密な予測へと接近するという点では利点がある。

前章で扱ったマイクロ脳仮説及び思想パラサイト仮説は、行動経済学を用いて認知資源論と接続可能である。行動経済学は認知心理学を経済学に組み込んだものであり、プロスペクト理論をはじめとするナイト(1959)が明示した計算できない確率である不確実性を計算することにも対応できる理論である。認知資源、また類似する用語として注意資源とは、注意力や集中力を使う作業をする際にかかる認知主体にかかる負担である。例えば、論文を執筆するなどの知的作業は身体自体は使わないものの疲労を蓄積させるものであり、肉体に負荷をかけていると考えることが可能である。実際、昨今の過労死では職場での人間関係のストレスや過剰な頭脳労働・感情労働といった非肉体労働が原因となっている。そこで認知資源という指標を導入することで負荷をコストと見なして数値化を試みて、行動経済学に代表される経済学的分析に接続させることが可能となるのである。

マイクロ脳仮説は、限定合理性をはじめとする人間の認知処理能力の限界についての考察のバリエーションであると見なすことが可能である。大量の選択肢がある場合にどれを選ぶかについて、人間は認知処理を途中で切り上げる傾向にあることをアイエンガー(2010)は示した（ジャムの法則、決定回

---

日々少しずつ転向していると表現している。

<sup>6</sup> 盛山は以下の 5 つにまとめている。1: コミュニケーションの結果約束が生じるが、現実社会ではしばしば守られること 2: ゲーム理論では一元的な利得に帰着されるが、現実では多面的な価値を生きていること 3: 現実では選択の結果が不明瞭であること 4: 現実では知識の共有が存在しそれが影響を与えること 5: 現実ではゲームの構造が固定されず変動がありうること

避の法則)。サイモン(1999)は効用関数の最大化ではなく適当な達成水準を設定した上でその達成水準を越えるまでしか労力を投下しないことが人間の行動パターンであるとして、これを満足化モデルと名付けている。このような認知資源を消費する認知処理活動の限界を、認知する対象である社会現象の複雑性に関連させたもの、とマイクロ脳仮説は学術的に位置付けることが可能である。

思想パラサイト仮説は、本来的には価値観の多元性を考えなければならない。ただし、認知資源と転向する思想同士の距離による転向コストの多寡という形である程度モデル化することができる。思想パラサイト仮説は一見認知資源論と無縁な思想的な議論に終始するものと思われがちであるが、以上の様な解釈をすることで認知資源論と接続させ、より客観的な分析に資することも可能となるのである。

### 3, 最大無責任戦術

マイクロ脳仮説と思想パラサイト仮説の二つを組み合わせると実際のフリーライダーの性質に大分接近するが、ここではさらに仮説を重ねて近似させたい。例えば、部下の手柄を横取りし、自分のミスは部下の責任に擦り付けるような上司、という事例を考えてみたい。この上司は確かにその時その瞬間の利益のことしか考えておらず、部下の斬新なアイデアにただ乗りする思想パラサイトも行っているが、ここで一つ疑問がわく。理論的には、進化ゲーム理論が説明する通り、協力することで社会的ジレンマを乗り越えようとする個体が適応する。また、アクセルロッド(1998)によれば当初裏切りを続けるプログラムが短期的に勝利しても長期的にはしっぺ返し戦略に淘汰される<sup>7</sup>。つまり、あまりにも露骨に裏切る個体はフリーライダーであると社会内部で認識されて、討伐・追放の対象になるリスクが高くなる。すなわち、上記の事例における上司は短期的に存在したとしても、何れは失脚・左遷という形で淘汰されるはずであり、中長期的には存在し得ないのではないかという説明が可能である。にもかかわらず、現実ではそういう上司が長年君臨して組織を疲弊させ部下を搾取し続けることに成功してしまう事例も多々見られる。この矛盾を理論的にどう説明すべきだろうか。

そこで、本章ではその手掛かりに軍事理論における戦術論に関する意思決定の類型を紹介する。ビジネスや社会運動などの非軍事領域においては戦術 (tactics) は戦略 (strategy) という言葉と混同されがちな用語であるが、軍事理論では両者は厳しく区分けされる。軍事に限らない形でこれらを一般化すると、戦術とは既存のリソースを有効に運用し具体的な事例において勝利する確率を上げ問題を解決するための手法であり、それに対して戦略とは組織全体の目的を大局的に示し、その方針に合わせてリソースを最適配分する行為である。いわば、戦術は(戦術に適用するための一般的普遍的原則である戦術理論を除き)短期かつ具体的なものであり、戦略はそれ自体が長期かつ抽象なものであると区分できる。

元陸上自衛隊陸将補の松村(2007)は戦場における戦術的意思決定の方針について、以下の 4 区分をしている。

a 効果最大案

b 成功期待値最大案

---

<sup>7</sup> アクセルロッドの見解は過剰に言いすぎている部分があることなど問題点をビンモア(2010)が指摘している。

c 最大安全値案

d 最小後悔値案

a は確率が少なくても当たったら大きい利得をもたらすことを実現させようとするというものである。宝くじで一等になるのは非常に確率が小さいが、それでも得られる利益の大きさを重視して挑戦するようなものを考えればよい。実際の戦術では宝くじとは異なり、司令官の采配で確率が十分に変動しうることも a を選ぶ強力な根拠となる。b は確率の期待値を考えた上でその期待値が最大化する選択肢を考えるものである。発生しやすさと利益を両面勘案するバランスの取れたものである。c はリスクの大きい選択肢を避けて常に戦力が残存するように安全策を取るというものである。d は司令官個人が最も心理的に後悔をしない形で主観的な選択をするものである。

松村は a、b、c はそれぞれ選ぶ価値があるが、d は選ぶべきではないと説明する。a は確かにリスクが高いものの、優れた司令官は直観力と強い意志で戦場の霧と言われる不確実性を自分に有利な方向に誘導させることで利益が得られる確率を増大させることが可能である。b は、a を実行できる名将が少ないことを考えれば一般的な司令官が目指すべき戦術である。c はリスクに過敏な司令官向きであるが、防衛戦時の際には特に有用である。d はあくまで司令官の主観のみを優先し、a、b、c のそれぞれの戦術的合理性をどれも採用しないので一番問題が大きいと松村は結論付ける。ただし、松村は d を批判しつつも、司令官が指揮・意志決定を放棄し、戦場において隷下の部隊が作戦指針を失い部隊ごとに個別最適な行動を取らざるを得なくなるよりは、最低限の行動基準となり一応の全体最適化が可能といえる d を選ぶこともやむを得ないと主張している。

松村の類型論は、戦術の実行者である司令官自らが結果責任を負うことを大前提にしている。そこで、a~d とは別に、戦術の実行者と結果責任を取る人間に関する類型を組み合わせることが可能である。

A 戦術の実行者と責任を取る人間が一致している（一致パターン、松村のモデルの前提）

B1 戦術の実行者と責任を取る人間が不一致であり、責任を取る人間が実行者の引き起こした結果責任を自らの意志で負う（ボス面倒見戦術）

B2 戦術の実行者と責任を取る人間が不一致であり、実行者が別の人間に責任を押し付ける（最大無責任戦術）

以上の類型を 4×3 の表で以下のように表すことも可能である。

表 1 松村の類型を元にした戦術組み合わせ表

	A 一致	B1 ボス面倒見	B2 最大無責任
a 効果最大			
b 成功期待値最大			
c 最大安全値			

d 最小後悔値			
---------	--	--	--

上記の表を見ながら B1 及び B2 における a~d を吟味する。B1 では意志決定者の上司が、実行結果が悪かった場合の責任を負うことで意志決定者のリスクを肩代わりさせ、安心させた上で挑戦することを可能とする。すなわち、意志決定者の責任は上司との直接的な関係性のみに縮減される。そのため、B1 の状態であれば a や b が A の状態よりも選ばれやすくなり、c や d は選ばれにくくなり、より積極的な意思決定を実行可能となる。B1 の状態は、例えば研究所の研究者が自由に斬新的な研究をすることができ、リスクを企業のトップが肩代わりするような事例が想定できる。この事例では、企業の負担は大きいものの、イノベーションを促進させ中長期的に他企業に対して優位に立ちやすくなるというメリットをもたらし、研究者と企業は共に win-win の関係にあるといえる。

それに対して B2 では意志決定者がその失敗を部下に押し付けている状態であり、いわば意志決定者にとってリスクは捨象されたものとなる。この場合やはりリスクのみならずリターンも大きい a が実行されやすくなる。ただし、そもそも実行者が組織内での目標を共有せずリターンに価値を見出さない場合や、己の主観的利益を追求することがそもそもの目的の場合は d や、松村が批判した d 未満の選択肢である指揮・意志決定の放棄という選択が選ばれることになる。

典型的な上記の状況は、例えば李氏朝鮮末期、列強の介入により国家存続が危機的であるにもかかわらず、上記の閔妃は「巫堂ノリ」という呪術儀式に熱中し数年分の国家予算を費やし国民から重税を取り立てた事例が該当する。巫堂ノリによる効用はあくまで閔妃個人が精神的に満足するだけであり、財政に無駄な負担を発生させることから、列強が介入する朝鮮の状況をますます悪化させる愚策である。

閔妃の意志決定は、近代化という大きなコストを払いリスクに直面する代わりに近代国家・強国化という長期的視点での大きな利益を目指す金玉均の効果最大案、数百年間続いてきたという経験的データがある李氏朝鮮の旧体制のまま存続を図るという大院君の期待値最大案、列強のいずれかに先んじて従属して庇護を得る閔妃とは別の事大主義者によるリスク最小化案の全てに当てはまらず、国家としての李氏朝鮮にとっての主観的な合理性、また客観的合理性も見当たらない。

しかし、朝鮮が国ごと植民地化されるまでの間は、閔妃は自分の命と権力さえ維持できれば、その失敗によって生じた損害を適当な他者に転嫁して押し付けることで豪勢な生活を楽しみ続けることが出来た。更に、仮に列強の圧迫により国が滅びた後でも、列強に事大することでそうした生活の継続を図ることも可能である。三浦梧楼の放った壮士たちの集団に日本人だけでなく朝鮮人も多く含まれていたことは、閔妃の敵対勢力の大院君が背後に存在していたことを考慮しても、それだけ朝鮮内部でもフリーライダー性が目に余ったということを示している。

#### 4. 無責任と責任の使い方 空気・認知の操作という再帰的行為

前章で提示した最大無責任戦術を選ぶ場合、組織の目的を無視して私益を貪ることが行われやすい。それでありながら責任を他者に負わせるという、閔妃のように後に報復されうるリスクある行為を行っている。

ただ、ここまでの文章で責任という概念を検討せずに使ってきたが、本稿で扱う責任とはそもそも

何だろうか。先に辞書的な定義を示す。デジタル大辞泉によれば、以下の三つの意味がある。

- 1 立場上当然負わなければならない任務や義務。「引率者としての一がある」「一を果たす」
- 2 自分のした事の結果について責めを負うこと。特に、失敗や損失による責めを負うこと。「事故の一をとる」「一転嫁」
- 3 法律上の不利益または制裁を負わされること。特に、違法な行為をした者が法律上の制裁を受け負担。主要なものに民事責任と刑事責任とがある。～である。

日常的には2の意味をよく使うが、本稿での意味は1も入る。組織・集団の中で目標を共有した上で共同行動を行い、失敗した際に発生した損害をどう回復させるか、ということが起きた場合を想定しているからである。

小坂井(2020)によれば、そもそも、責任という概念自体が、絶対唯一神がなくなったことで近代的個人を万能なものとし、近代的個人が持つべき規範として生じた近代の虚構である。社会心理学や認知心理学の実験結果が明らかになるにつれ、ヒューム(2019)がいみじくも「理性は情動の奴隸」と言ったように、人間は主体的な存在ではなく、責任を取り切ることにはできない存在であることが判明していった。にもかかわらず、責任を取らせることによって社会的ジレンマの解消を促す必要性から、主体性や責任という概念が生じ支持され続けてきたのである。これらの虚構性を見抜き暴いたら、今度はどのような虚構性をどう用いて社会的ジレンマを解消させるか、という社会制度設計の見直しの話へと移行することとなる。

社会の維持に責任が必要であるということは、責任によって公共財が形成されている、ということが可能である。そうすると、責任もまたフリーライドされる対象となりうることを導くことが出来る。実際、フリーライダーは責任の重要さを主張し他者に責任の重要さを内面化させて責任を取らせつつ、自分は無責任でいることが短期的な最適解となる。

それでは、前章から疑問であった責任をどう押し付けるのか、という手法にはどのようなものだろうか。端的に言えば、情報の非対称性を用いて組織内のコミュニケーションを阻害し(松井, 2020)、空気を操作することでその組織・部署・集団内部の意思決定の際に自分に有利な状況を作ること(松井・中尾, 2020)で可能である。例えば口八丁手八丁な口の上手い社長秘書が社長と社員のコミュニケーションを遮断し情報を操作しつつ、場の空気を誘導して社長秘書にとって都合の良い決定、会社は今業績が大変だという名目を用いて社員の残業時間を増加させることを社員に飲ませる、というような事例が考えられる。社員の残業時間が増えることで、会社内で処理される仕事量が増加し、利益の向上が見込むことが出来るという点で秘書も含む会社の利益になるほか、それを実現したのは秘書によるものであると社長に言うことでますます気に入られやすくなる。こうして、秘書はまんまと空気の操作によって自分の損失なしで社員の負担を増加させることに成功したことになるのである。

以上の情報の非対称性の悪用や空気操作を勘案しても、なおも疑問は残る。いつの間にか空気がある人物の主導で動かされて集団における意思決定が自然に行われていた、という場合は十分にありうる話である。しかし、明らかにその人物のせいで決定が行われたということは、その場にいた全員は実体験として強く印象に残るはずである。すなわち、その決定の結果受けた損害は、空気操作者にこそ責任を負わせるべきである、という反動が起きて然るべきである。フリーライダーが他者に責任を負わせて自身の責任回避に成功するにはさらに工夫がいるようである。



以上の疑問に対しては、ルークスの三次元的権力論(1995)が参考になる。ルークスは通常の権力を一次元的権力とし、二次元的権力としてバラツツとバクラツツのが挙げた、企業城下街での環境破壊を市議候補たちが企業との対立を恐れて誰も扱わずに争点の顕在化自体を禁止させた企業の権力である非決定権力を説明している。その上でルークスは三次元的権力として、「そもそも争点を認識させない」という非決定権力以上に強大な権力があると説明している。ルークスの三次元的権力論を代入すると、空気によって操作されているのは意思決定だけでなく、認識をも含まれているのではないか、というものである。

三次元的権力の事例として、女子同士のいじめで典型的に見られる手法としてシモンズ(2003)が提唱した「裏攻撃」の中でも「いじめを友情と思込ませる」手法や、内藤(2001)によるいじめが良いとみんなが思う空間である  $\beta$  秩序論が該当する。裏攻撃とは親や教師に把握されないように表面的には仲良しであるように見せつつ、人間関係を駆使して静かにいじめるという手法である。突然無視するようになる、悪口を書いたメモを教室で回す、などの具体的な方法をシモンズは明らかにするが、証拠として提示しにくく間接的で巧妙なものである。その中でもいじめを受けてもそれもまた友情であると思わされるといふものがある。いじめの主犯は人気者で人づきあいがうまく、「主犯と友人でいる」ことでクラス内の地位がある程度保証されることや、主犯のカリスマ的な魅力のせいでいじめを友情と認識させられるように認知的に誘導される。内藤の  $\beta$  秩序論もシモンズの裏攻撃と似た構図を持っており、教室の中である生徒がいじめられている場合その生徒がいじめられて当然であるという認識が定着し、教室内の生徒のみならず教師もいじめを悪いことであると認識できなくなってしまう。実際、教室から離れ大人になる、いわば  $\beta$  秩序から解放されると「なぜあの子をいじめたのか、振り返っても分からない」という奇妙な現象が発生する。裏攻撃にせよ  $\beta$  秩序にせよ、空気によって操作されるのは意志決定だけではなく認識も含まれていることは明白である。

以上の記述をまとめて、最大限フリーライドを行うフリーライダー、敢えて呼ぶならば「閔妃的フリーライダー」とはどのような存在であるかを整理したい。それは既存の議論で出てくるおなじみのフリーライダーの様な、囚人のジレンマ等で想定される完全合理性が備わっている存在ではない。閔妃的フリーライダーは短期的かつ個人的な利益しかそもそも認識できないミクロ脳であり、勝ち馬に乗ることを優先する思想パラサイト行為も厭わない。その上で最大無責任戦術に基づいて他人に責任を負わせながら、最小後悔案に基づいて非協力的な利己的行動を実行する。そして確実に他人に責任を負わせるために情報の非対称性を駆使しながら空気と認知を操作する。空気と認知を操作することはゲームの利得表を変えさせる行為でもあり、フリーライダーによる社会行為によって社会を再帰的に変動させる効果をもたらす。いわばループ構造になっているため、モデル化する場合は複雑な現象を考える必要があることになる。

こうした閔妃的フリーライダーに当てはめるのが適切と思われる事例は、去年のオリンピック時に世論を騒がせたミュージシャンである小山田圭吾である。小山田がオリンピック関連の仕事辞任することとなったのは、彼が小中高の時代に障害者の同級生に対して仲間と共に酷いいじめを行っていた過去が明らかになり、オリンピックだけでなくパラリンピックの理念と合わない、というものである。いじめの実態は学校や音楽業界・広告業界の小山田の身内の中で知られていたが、小山田のコントロールできる範囲に限定されていた。雑誌でいじめの自慢をしていたのはあくまで身内しか読まないものという認識故であったと思われる。雑誌に載ったことで自分の悪行が伝わることを部外者に認識できなかった程度に短期的な思考をしており、ミクロ脳的である。

さらに、小山田は思想パラサイトも行っている。小山田はいじめの実行者で自慢・マウンティングが好きという自己愛性パーソナリティ障害を彷彿させる性格をしている。一方で彼は反原発運動に参加するなど左派の政治思想にコミットしている。左派は人権の尊重を唱えるなど、彼がいじめた障害者などの弱者を抑圧・搾取することには本来的には反対する立場である。しかし、情報の非対称性を用いて空気や認知を操作することが出来るならば、まさにゲームのルールは変わることになる。弱者を守れと言うことで脚光を浴びつつばれないように弱者をいじめることが可能であれば、確かにいじめ加害者にとってこれほど得なことはない。誰もが反対しにくい、光り輝き人気が高いイデオロギーに寄り添いその象徴資本の高さから恩恵を得つつも、空気と認知を操作することによって裏で悪事を行い続けることが可能となる構造を構築することが可能である。聞こえが良い思想の裏でその思想にコミットする集団や個人が悪事をなした事例は、宗教戦争やナショナリズム、共産主義革命などで既に散々論じられてきたことであるが、そのコアの部分はこういういじめが好きで個体の隠れ蓑としてイデオロギーが手段として悪用される、というものであったといえるだろう。恐らく小山田が戦前に活動していれば、反原発や人権を唱える代わりにナショナリズムと戦争を賛美し、これに同調しない人々を見下した可能性が高いであろう。小山田の様な関妃的フリーライダーにとって、ありとあらゆるイデオロギーは、自分を着飾り自分の業界の中で自分の象徴資本を高めるための着脱可能なファッションである。

ボードリヤール(2015)によれば、価値とは差分でしかないが、関妃的フリーライダーである小山田にとって差分=価値を生じさせて自分の価値を高めてそれに対して他者の価値を低めることのためにイデオロギーが役立つのである。そのため、たとえどのようなイデオロギーであっても、他者を抑圧し責任を押し付けることができさえすればよいものである。実際、小山田のいる業界である音楽・広告業界ではあくまでファッション的な感覚ではあるが、反原発や人権思想などの左派的イデオロギーが価値のあるものとして信仰されており、左派的イデオロギーに帰依していると思われることで、ブルデューの様に分析するのであれば、界の象徴資本的に、その界の中で地位が向上する。勿論その中で他者を搾取し責任を押し付けても空気と認知を操作することで露見することを防ぐ。まさに思想パラサイトによるフリーライド行為にほかならない。

関妃的フリーライダーによる思想パラサイトは現代的な問題を分析する場合でも有用な概念となる。例えば、昨今のアメリカを中心とするポリティカル・コレクティブネス (PC) を巡る諸議論も、既に 90 年代の段階で三本松・関井(1994)は「批判的知識」の普及は、被害者側に連帯意識と優越感を醸成し、逆に被害者以外の側に加害者としての劣等感を植えつける<sup>8</sup>」と書き、白人男性を抑圧することが目的化していることを示している。この表現からわかるように、PC もまた他者を抑圧するイデオロギーとして機能しているのであれば、その高い道徳的理念の理想・正義が強ければ強い程、関妃的フリーライダーはそれを逆手にとって道具にしているのではないか、という形で問題提起をすることが可能である。

本稿で見出したような関妃的フリーライダーは社会的ジレンマの解決のために立ちふさがる難敵である。空気や認知の操作、責任の押し付けなど、これまで社会的ジレンマ論で積み上げてきた解決法をすり抜けてくる存在だからである。だが、こうした存在を言語化したことで、モデル化の第一歩となる。今後はこうしたフリーライダーの諸行動及び原則を精密化させて数理モデル化を目指したい。

---

<sup>8</sup> 三本松と関井の研究ノートの原文では「植え付ける」とあるが、誤植と思われる。

## 謝辞

本研究を進めるにあたって、明星大学非常勤講師の緒賀正浩先生から思想に対するフリーライドの可能性とその効果の考察について示唆を頂いた。また、一橋大学社会学研究科博士後期課程の中尾優奈さんには戦略論の視点からアドバイスを頂いた。両者に深く御礼申し上げる。

## 引用・参考文献

- 神野慧一郎(2002)『我々はなぜ道徳的か ヒュームの洞察』勁草書房。
- 海野道郎(2021)『社会的ジレンマ 合理的選択理論による問題解決の試み』ミネルヴァ書房。
- 盛山和夫(2021)『協力の条件 ゲーム理論とともに考えるジレンマの構図』有斐閣。
- 藤井聡(2003)『社会的ジレンマの処方箋 都市・交通・環境問題のための心理学』ナカニシヤ出版。
- 山岸俊男(2000)『社会的ジレンマ 「環境破壊」から「いじめ」まで』PHP 研究所。
- ピエール・ブルデュール, 石井洋二郎訳(1990)『ディスタンクシオンⅠ 社会的判断力批判』藤原書店。
- ピエール・ブルデュール, 石井洋二郎訳(1990)『ディスタンクシオンⅡ 社会的判断力批判』藤原書店。
- 思想の科学研究会編(2012)『共同研究転向 1 戦前篇上』平凡社。
- 思想の科学研究会編(2012)『共同研究転向 2 戦前篇下』平凡社。
- 思想の科学研究会編(2012)『共同研究転向 3 戦中篇上』平凡社。
- 思想の科学研究会編(2012)『共同研究転向 4 戦中篇下』平凡社。
- 思想の科学研究会編(2013)『共同研究転向 5 戦後篇上』平凡社。
- 思想の科学研究会編(2013)『共同研究転向 6 戦後篇下』平凡社。
- 竹内洋(2018)『清水幾太郎の覇権と忘却 メディアと知識人』中央公論新社。
- 庄司武史(2015)『清水幾太郎 異彩の学匠の思想と実践』ミネルヴァ書房。
- 庄司武史(2020)『清水幾太郎 経験、この人間的なるもの』ミネルヴァ書房。
- 清水幾太郎(1972)『本はどう読むか』講談社。
- 木村幹(2007)『高宗・関妃 然らば致し方なし』ミネルヴァ書房。
- フランク・ナイト, 奥隅栄喜訳(1959)『危険・不確実性および利潤』文雅堂書店。
- シーナ・アイエンガー, 櫻井祐子訳(2010)『選択の科学』文藝春秋。
- ハーバート・A・サイモン, 稲葉元吉・吉原英樹訳(1999)『システムの科学 第3版』パーソナルメディア。
- ロバート・アクセルロッド, 松田裕之訳(1998)『つきあい方の科学 バクテリアから国際関係まで』ミネルヴァ書房。
- ケン・ビンモア, 金澤悠介・海野道郎訳(2010)『ゲーム理論』岩波書店。
- 松村劭(2007)『名将たちの決定的戦術』PHP 研究所。
- 小坂井敏晶(2020)『増補 責任という虚構』筑摩書房。
- デイヴィッド・ヒューム, 石川徹・中釜浩一・伊勢俊彦訳(2019)『人間本性論 第2巻 普及版 情念について』法政大学出版局。
- 松井勇起(2020)「現代組織における「宦官」とは 三田村泰助『宦官』の組織論的再解釈」八洲学園

八洲学園大学紀要第 18 号 (2022)、p.25~p.36

大学紀要, 16, 61-67p.

松井勇起・中尾優奈(2020)「「空気」、そして「空気」の操作主体に対する社会科学的考察 富永恭次  
陸軍中将・東條英機陸軍大将間の組織内コミュニケーション行為分析より」戦略研究学会, 27, 25-48p.

スティーブン・ルークス, 中島吉弘訳(1995)『現代権力論批判』未来社.

レイチェル・シモンズ, 鈴木淑美訳(2003)『女の子どうして、ややこしい!』草思社.

内藤朝雄(2001)『いじめの社会理論 その生態学的秩序の生成と解体』柏書房.

ジャン・ボードリヤール, 今村仁司・塚原史訳(2015)『消費社会の神話と構造 新装版』紀伊國屋書店.

三本松政之・関井友子(1994)「ポリティカル・コレクトネス論争に関する研究ノート」人間科学研究,  
16, 88-97p.

(受理日: 2022 年 1 月 27 日)

(まつい ゆうき・八洲学園大学 生涯学習学部 生涯学習学科 非常勤講師)